

卒業論文の要旨

論文題目	公共の意味とあり方について-サンデル、ハーバーマス、福澤の言説を手がかりとして-
氏名	熊坂柊吾
メジャー	倫理学
<p>(要旨)</p> <p>本論文では、種々の思想家たちが取り組んできた公共概念に関する問題をわれわれ日本人はどのように理解していて、それが果たして正しいものであるのかを改めて検討した。現代日本では、公共概念が誤った形で理解されているとの認識に立ち、アメリカ、ヨーロッパそれぞれにおける公共概念と比較し、公共の本来の姿を考察した。</p> <p>現代社会はグローバル化が進み、多様性の尊重が叫ばれる時代ではあるが、なんでもありというわけにはいかない。どのような概念であっても、それについて本当の意味を理解しておかなければ、自分が一体何をいいたのかさえ分からなくなってしまうのである。公共概念であってもその本来の意味を知っておかなければ、誤用や悪用を防ぐことができないのである。</p> <p>以上の問題関心から、日本において使用される公共概念は「滅私奉公」や「公共の福祉」など、何かを制限するネガティブなものとして捉えられているが、本来の公共概念は、個人を制限するものではなく、活かすものなのであるということを明らかにした。</p>	
<p>(指導教員の推薦のコメント)</p> <p>この卒業論文は、論文題目にみるように、近現代日本社会において、しばしば個人の人権を抑圧する側に加担し、その正当化原理として作用してきた「公共」概念が本来的に内包している意味とあり方について、アメリカのマイケル・サンデル、ドイツのユルゲン・ハーバーマス、日本の福澤諭吉の各言説を手がかりにして分析・検討したものである。結論として、公共は「決して個人を抑圧するものではなく、個人をむしろ活かすことがその本来の姿である」、つまり「公共とは問題解決のため、われわれ自身が学んだ知識や経験を社会のために生かそうと思えるような環境でなければならない」という思想的に重要な点がテキスト内在的に分析され確認されている。</p> <p>本卒業論文は、研究手法としてのテキスト内在的読解を遂行しつつ、共同体論者のサンデルからフランクフルト学派のハーバーマスの公共圏論の検討をへて、福澤諭吉の実学思想（人間交際の場としての公共論）へと至る意味のある考察の地平を切り拓いたものと言える。以上の理由から、本卒業論文を2019年度の優秀卒業論文として推薦する。</p> <p style="text-align: right;">卒業論文指導教員：中島 吉弘（LA学群教授） 2020年2月15日</p>	